

豊かな海と陸の資源に恵まれた三陸から房総にかけての太平洋沿岸の目を覆いたくなる惨状。そのうえ、福島第一原発の忌まわしい事故が重なる。

三陸海岸に「津波でんでんこ」ということばがある。津波のときは他人におかまいなく各自で逃げろ、という教訓。明治の三陸大津波（一八九六年）で二万二〇〇〇人を失った経験からうまれたという。戦後、人びとはこのような自己防衛だけでなく、長大な防潮堤を築き、避難訓練をくりかえすなど、「万全な」津波対策を講じてきた。しかし、東日本大震災は、自然のエネルギーの前にはいかなる人間の営みもあらがえないことを実証した。

これから、被災地のみなさまは希望を胸に、自らの力と国・行政やNGOなどの支援を活用して、復旧・復興に歩みだすことになる。ここで復興の手掛かりとなる話を紹介しよう。ひとつはミクロネシアのサンゴ礁島民の体験。一五〇年前に大波が島を洗い、作物が全滅したとき、首長は島民の半数を遠くの高島（火山島）に集団移住させた。それから現在までも二島の住民は相互訪問し、災害時の援助や伝統文化の交換をおこなっている。ふたつ目は、インドネシアのジャワ島中部地震（二〇〇六年）の話。ジョクジャカルタ地方では、ゴトロンヨンという相互扶助の慣行が村の生活を支えてきた。こ

東日本大震災におもう

「結い」でつながる「まち」づくりを

須藤 健一 国立民族学博物館長

の慣行は、震災後にも生かされ、若者が自前の材料と労力を出しあって家を再建し、村を復興させた。ふたつの話は、平坦な島の住人が現住地の他にも住める場をもつこと、復興には日本の「結い」のような人と人の信頼とつながりが重要であることを教えてくれる。

東日本大震災からの復興の過程で、被災地で生活を共にする人びとが互いを支え合う多様なつながりのもとに、あらたなコミュニティ（まち）と市民社会を築くことを期待する。そして、わたしたちは今こそ、便利で楽な「よりよいくらし」志向から、自然とのつながりを見直し、「身の丈にあったくらし」のありようを再考するときかも知れない。

みんなはくは、大学共同利用機関として、また博物館としてこの苦難にどのようにかわるのか。第一には、被災地の研究者が、本館の研究資料を利用できる種々の研究支援をおこない、第二には、被災地の博物館、資料館、寺社などの壊れた文化財や民俗資料などの保存や修復などを手伝い、第三には、海外にもつて日本の状況、とりわけ教育研究の現況についての的確な情報を送信することである。

そして、これからの復興に生かすためにも、後世の人びとに二度と味わわせないためにも、「悲惨な記憶」を記録にとどめることが文化人類学とその関連する研究分野の大事なしごとになる。

月刊
みんぱく
5月号日次

1 東日本大震災におもう
「結い」でつながる「まち」づくりを 須藤 健一

2 特集 文化交渉のダイナミズム
——あたらしくなったアメリカ展示

3 出会う——異文化との接触と交渉 関 雄二

5 宗教カレンダーから民族移動を見る 中牧 弘允

6 イヌイット・アートと著作権 岸上 伸啓

7 許可なく撮るべからず 伊藤 敦規

8 時代を記録するやきもの 齋藤 晃

9 名人の看板 鈴木 紀

10 研究フォーラム
布からモノの働きを知る
関本 照夫

12 みんなく Information

14 企画展案内
企画展「民族学者 梅棹忠夫の眼」
吉田 憲司

16 散策と思索の径
「ラチオ塔」を訪ね歩く
吉井 正彦

18 多文化をささえる人びと
門真市立砂子小学校の取り組み
中国にルーツをもつ子どもたちのために
高橋 朋子

20 歳時世相篇
こどもの日と鯉のぼり
中牧 弘允

22 フィールドで考える
聖典の朗読を競う少女たち
小杉 麻李亜

24 次号予告・編集後記